

通信

書評

『現代インド研究』は、「現代インド地域研究」プロジェクトに関心を持つ全ての人々や団体のためのフォーラム誌たるべく創刊された。そのため、「通信」の欄を設けて、「研究途上の発見や仮説をコンパクトに提示する論考や、既出の論文・研究ノート等に対するコメントやそれに対する応答など」（本誌投稿規程第1項）も掲載できるようにしている。今のところ「通信」への投稿はないが、編集委員会としてはフォーラム誌として現代インド・南アジア研究に関する議論の多角化・活性化を図りたいと願っている。そこで、第3号から「通信」欄を活用して書評を掲載することにした。対象とする書物の選定や書評者の依頼は編集委員会で行うが、取り上げるのは近刊の南アジア研究書を原則としたい。良質な研究書を幅広く紹介することも大きな目的であるが、これをきっかけとして「通信」における議論の活性化につながれば幸いである。

丹羽京子『タゴール (Century Books 人と思想)』（東京：清水書院、2011年、264頁、893円、ISBN: 978-4-389-41119-0）

（評）北田 信*

19世紀後半から20世紀初頭、カルカッタは大英帝国の東半分の中心として機能し、そこにはヨーロッパ風の楼閣が立ち並び、ヨーロッパ最新のモードや映画などの娯楽がいち早く輸入され、人々は西欧風の都会生活を楽しんでいた。この時代に、新精神を表現するべく生まれたのが近代ベンガル語である。この新しい言語を使用して、新聞や啓蒙的書物、さらに“ノヴェル”や“ロマン”が著され、メガロポリスに暮らす人々の葛藤と苦悩を写すようになる。

ところが面白いことに、この新生の言語の成り立ちは、南アジアの辺境地ベンガルで話される平易簡明な民衆の言葉を礎とし、これにサンスクリット語の語彙を豊富に加えて高度で抽象的な議論を行うことを可能にしたものだった。サンスクリットの造語法を用いて、西洋から大量輸入された新概念の訳語が作られた。この大がかりな新言語創造は、東京で関東方言と漢文の結合によって行われた作業によく似ているが、時間的には日本に先行していた。この新しい時代のベンガル語の文学に触れる者は、そこに、古のベンガル地方で盛んに信仰されていた密教の官能的法悦や、ラーダー・クリシュナの天上的愛の恍惚がいまなお溢れ、さらにそれがヨーロッパ世紀末の繊細な陰影と絶妙に混合されているのを味わうであろう。

* 大阪大学大学院言語文化研究科准教授、中村元東方研究会連携研究員

・ 2012, *The Body of the Musician, An Annotated Translation and Study of the Pindotpatti-Prakarana of Sarngadeva's Sangitaratnakara*, Bern: Peter Lang.

・ 2012, “Caca Songs: ‘The Oral Tradition in Kathmandu,’” in Hiroko Nagasaki (ed.) *Indian and Persian Prosody and Recitation*, Delhi: Saujanya Publications, pp.193–227.

こうして生み出された近代ベンガル語の表現の可能性を極限まで切り開いたのがタゴールである。彼のベンガル語の文章には、当時のカルカッタの繁栄の絶頂が、雑踏のざわめきが、都会の倦怠と憂鬱が、こだましている。

それらは一見したところきわめてシンプルな文体で書かれている。古来インドの芸術においては、詩的暗示が複数のコンテクストを互いに連繋させることにより、重層的な広がりを持たせる、ということが好んで行われてきた。タゴールの用いる言語においても、単純なことばが様々な連想を喚起し、複雑なフレイヴァーを醸し出す。ちょうどインドの弦楽器にたくさんの共鳴弦が張られてあって、たったひとつの音を爪弾いただけなのに、それに複数の弦が呼応し、顫えるような音の輝きが波紋のごとく広がってゆくのに似ており、あるいは同時代にヨーロッパで製作されたランプ・シェイドが投げかける複数の淡い色彩の微妙な重なりのごとくでもあり、東洋のメガロポリスがもっていただろう美的な雰囲気を漂わせている。この時代に始まるベンガル語の近代文芸は今日なお健在で、読者層も厚く、それをめぐる批評活動も活発である。

本書は、ベンガル語の現代文学研究・作品紹介に長くたずさわってきた丹羽京子氏（以下敬称略）が、タゴール周辺や彼以後の文学潮流、さらに今日の文壇事情まで踏まえて書いた評伝である。丹羽が本書において描きだすタゴール像は、聖人の退屈な肖像ではない。今でもベンガルにおいてはいたる所でタゴールの詩歌が口ずさまれ、文学者たちはタゴールこそを文学の源泉とみなしているが、その理由はなにか？という問いに対する、丹羽なりの答えがかたちとなったものが本書である。丹羽は、このひとを“大いなる未完成”あるいは“未完成の完全なる詩人”と呼ぶ。本書は一般読者に読みやすい平明な語り口で書かれているにもかかわらず、実は、ベンガル人にとっての、あるいはベンガル語文学におけるタゴールとはなにか、という核心的な問題を論じたものであり、等身大のタゴールに近接しようという試みである。

本書にはタゴールの生涯と作品に関する一通りの情報が、わかりやすくまとめられている。しかし、そこそこで言及される些細なエピソードや、それについての丹羽の気の利いたコメントによって明らかにされるのは、従来の紋切り型の偉人像からは漏れていた、詩人の意外な面である。

タゴールのノーベル賞受賞とそれに続く世界的なタゴール・ブームを、丹羽はやや冷静に描いている。ヨーロッパにおける英訳ギーターンジャリーへの一過性の東洋趣味的熱狂と、ベンガル人のベンガル語ギタンジョリ理解は、別ものだ、と丹羽は言う。意外にもタゴール自身は海外の文学潮流にはさほど詳しくもなく、というより、それほど興味もなく、また、ヨーロッパ詩を模倣することによって近代的であろうとした当時流行のベンガル語詩のスタイルにも距離を置き、むしろ中世ベンガル語の宗教的恋愛詩を愛し、その様式を受け継いだ。世界をめざす野心的な作家としてではなく母語ベンガル語の伝統的な詩人として出発したのだ。（186頁）

タゴールは自作の戯曲を演じる劇団を組織したりもしているが、そのモデルとなったのは、ベンガル地方の民俗的な巡回演劇（ジャットラ）だった、という指摘（96頁）も面白い。19世紀末のカ

ルカッタでは、ヨーロッパのショウ（ヴァラエティーやキャバレー）とインド民俗芸能を融合させてベンガル語の近代演劇が発明され、さらにこの様式が娯楽映画に受け継がれていく。タゴールと並びベンガル語近代演劇の父と称されるギリシュ・ゴシュの率いる劇団も、ジャットラによく似た巡回劇団であったようで、花型女優ビノディニ・ダシがあまりうまいとは言えない文章で綴った手記なども残っている。それによれば、初期の近代劇団はかなりこじんまりとしていたようで、地方巡業の佻しさなども赤裸々に描かれていて興味深い¹⁾。こうしたことはインドに限らず、歴史的な大劇作家たとえばラシーヌやモリエール、世阿弥などの率いた劇団も、常にパトロンを求めてさ迷う小さな旅芸人の一団だったようだ。表では煌びやかな旅芸人の、舞台裏の哀愁や猥雑に私は限らない興味を覚える。

放浪詩人バウルのように、タゴールは絶え間なく前進した。最近の丹羽の現代ベンガル韻律に関する論文²⁾においては、タゴールの各時期の作品の韻律を分析することによって、彼の革新性を浮き彫りにしている。タゴールは、中世ベンガル語詩の伝統韻律を換骨奪胎して現代的な韻律理論に結晶化させ、それを応用して作詩してゆく。そうかと思えば、創作後期に入ると、自分が作った決まり事をあっさり捨て去ってしまい、散文詩によって表現を始め、第二次世界大戦へと突き進む世界の不条理をテーマとするようになる。（203頁）詩人の後期詩集は、ベンガル文学の評論家の間でも評価が分かれるようで（200頁）、本書に引用される作品も、難解な印象がある。これらはもはやギタンジョリの甘美さを持たないが、しかし醜美を超越する魅力を持つ。人生最後のこの段階で、行き着くところまで行き着いてしまったのに、またもや卓袱台をひっくり返し、帳を強引に開けて次の段階に踏み込んでいくような感があり、丹羽の解説がなければなんだかよくわからないほどで、私は強く心を打たれた。

本書のもうひとつの重要なテーマは「女性」である。詩人と女性のソウル・メイトたちとの交流（第6章）を、丹羽は女性研究者としての視点から分析する。タゴールは生涯にわたって何人かの魅力的な女性と知り合ったが、これらの女性たちが創作上のインスピレーションの泉となったことは、よく知られている。ベンガル文化においては、古来、女性がシャクティ（エネルギーの源泉）として男性を牽引していく、という性格が顕著だが、それが現代の文化・心性にも多分に影響を及ぼしているのか、女がひとたび顕われると、男はあれよあれよというまにどんどん引きずり出され、次元を何段も超えて連れて行かれる、ということになる。

丹羽は、ベンガル語圏の女性作家の紹介にもつとめており、バングラデシュの女性作家の作品を翻訳出版したりもしている。第5章では、タゴールの小説に描かれる「女性」が焦点の一つとなっている。サンスクリット語や中世ベンガル語などの南アジアの古典文学においては、女性が一人称で語り、自律的に行動する、という事例はほとんど存在しない³⁾ので、タゴールの小説の中で、女神ではなく普通の主婦が物語る、というのは、南アジア文学史上の画期的な出来事である。女性が発する言葉によって、新しい文学世界が創出されている。

いろいろなエピソードの中で特に可笑しいと思ったのは、タゴールが70歳近くになって書いた小説『最後の詩』（臼田雅之の翻訳がある）の主人公オミットが、“大のタゴール嫌い”の青年として人物設定されているということである。（151頁）タゴールはこの小説の中でこの生意気な青年に、よりによって「タゴール批判を展開してタゴール信奉者たちの不評を買う」ということをさせてしまうのである。ベンガル文壇においても、世界文学作家としても地位を確立していたような老作家が、自分の作品の中で茶目っ気たっぷりに自己批判をしてみせるとは、まったくいかしている。この小説では至る所でタゴールの冗句が炸裂しなかなか痛快である。タゴールの散文は上品に書かれているようでいて、そこそこに小気味よい皮肉や自虐的ギャグが香辛料のように散りばめられており大いなる魅力となっている。

タゴールに関する著作評論は多いが、本書はベンガル語文学の専門家が書いた初めての本格的なタゴール評伝である。これを機会に、ベンガル語原文からのタゴール新訳や、タゴール以外のベンガル語近現代文学の作家たちの紹介が活発になることを切に待望する。

註

- 1) Lyne Bansat-Boudon (ed.), *Théâtres Indiens*, Collection Purusartha, no. 20, Paris: Éditions de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales, 1998 所収の France Bhattacharya の論文を参照せよ。
- 2) Makoto Kitada 2012, “The Development of Metre in Modern Bengali Poetry,” in Hiroko Nagasaki (ed.), *Indian and Persian Prosody and Recitation*, Delhi: Saujanya Publications, pp. 229–254.
- 3) しかしながら中世ベンガル語の代表的叙事詩モノシャ・モンゴルは例外的に、女性が自律的に行動する物語である。

山下博司・岡光信子『アジアのハリウッド—グローバリゼーションとインド映画』（東京：東京堂出版、2010年、345頁、2,800円＋税、ISBN: 978-4-490-20690-6）

（評）深尾 淳一*

本書の最も大きな特徴は、これまでほとんど取り扱われてこなかったような現在のインド映画の産業としての実態を、製作上の問題から、その担い手の背景、作品の特徴と多様性、異文化圏での受容のあり方にいたるまで詳細に描いた点にある。世界的に見てもインド映画研究の主流となっているのは、社会学的、あるいは、映画論的な観点から、その社会的位置づけや作品分析を主眼とし

* 映画専門大学院大学准教授（南インド考古学・地域研究）

・（出版準備中）、「グローバル化とインド映画産業—インタビュー調査を通して」、『地域研究』第12巻第2号。

・ 2004、「南インド、タミルナードゥ州における先史・原史文化の連続性」、『拓殖大学人文・自然・人間科学研究』、第11号、79–95頁。